研究紀要Ｒ５－１

島根の子どもの資質・能力を育む授業づくり
～授業構想において大切にしたいポイントの検討～（１年次）

島根県教育センター
企画・研修スタッフ　共同研究

目　次

【要　旨】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

1　研究の背景　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2　研究の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（１）２か年の研究の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（２）令和５年度（１年次）の研究の目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

3　研究の計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（１）令和５年度（１年次）の研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（２）令和６年度（２年次）の研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

4　研究の実際　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（１）「指導と評価の計画」及び「本時の展開」の作成　・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
（２）「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想するうえで大切にしたい
ポイントの整理　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（３）「指導と評価の計画」において大切にしたいポイント　・・・・・・・・・・・・・・ 4
（４）「本時の展開」において大切にしたいポイント　・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

5　考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
（１）「指導と評価の計画」において大切にしたいポイントから見いだした重点　・・・ 16
（２）「本時の展開」において大切にしたいポイントから見いだした重点　・・・・・・ 16

6　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
（１）１年次の成果について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
（２）２年次の研究について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

【補足資料１】「指導と評価の計画（小学校　算数）」　・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

【補足資料２】「本時の展開（小学校　算数）」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

【引用文献】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

【参考文献】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

島根の子どもの資質・能力を育む授業づくり
～授業構想において大切にしたいポイントの検討～（１年次）

島根県教育センター　企画・研修スタッフ　共同研究

【　要　旨　】

本研究は、一人一人の子どもの資質・能力を育むために、指導と評価の一体化を図った授業構想の在り方を提案することを目的とした。１年次は、「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想するうえで大切にしたいポイントを見いだすとともに、指導と評価の一体化を図った授業構想の在り方を検討した。

１年次の研究を通して、「指導と評価の計画」を構想するうえで大切にしたいポイントを、単元の目標（ねらい）に係ること、単元・題材の流れ・子どもの思考に係ること、各教科等の見方・考え方に係ること、学習評価に係ること、活用場面に係ることに類別し、整理した。また、「本時の展開」を構想するうえで大切にしたいポイントを、授業構想全体に係ること、導入場面に係ること、展開場面に係ること、終末場面に係ることに類別し、整理した。さらに、指導と評価の一体化を図った授業を構想するためには、学習活動における「子どもの具体的な姿」をイメージし、子どもの資質・能力を育むための具体的な「手立て」や「支援」を明確にしておくことの重要性が見えてきた。

【キーワード：授業構想　資質・能力　指導と評価の一体化　子どもの姿】

１　研究の背景

令和５年度に実施された全国学力・学習状況調査のうち、小学校算数、中学校数学及び中学校英語における島根県の公立学校の正答数分布のグラフを**図１～３**に示す。この３つの教科について、島根県は全国と比較して正答数が多い子どもが少なく、正答数が少ない子どもが多いことがわかる。

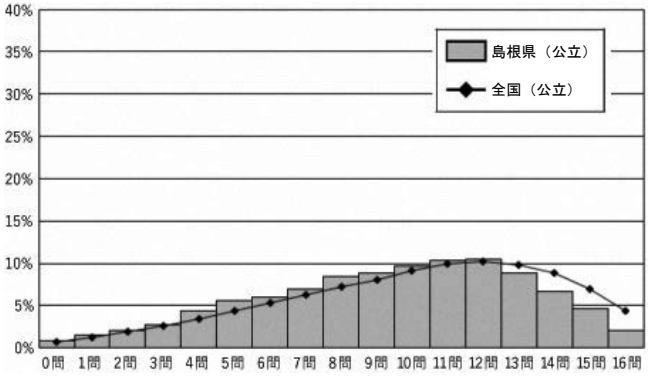


図１　小学校　算数（横軸：正答数、縦軸：児童の割合）

出典：「令和５年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）　島根県（公立）結果概要」[1] p.5

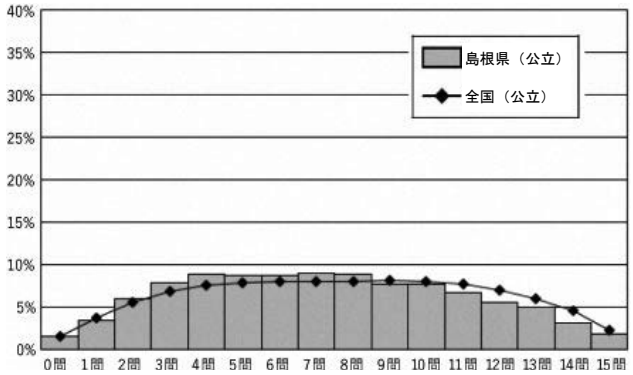


図２　中学校　数学（横軸：正答数、縦軸：生徒の割合）

出典：「令和５年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）　島根県（公立）結果概要」[2] p.7

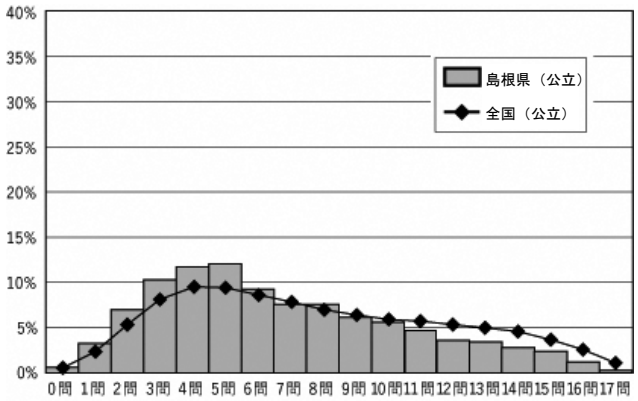


図３　中学校　英語（横軸：正答数、縦軸：生徒の割合）

出典：「令和５年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）　島根県（公立）結果概要」[3] p.8

「授業に関して困っていること」について、島根県内の一部の学校において聞き取りを行ったところ、99 件のうち 23 件が「子どもの学力差」に関するものであった。一部の学校における聞き取りではあったが、この他の学校においても同様に学級集団における「子どもの学力差」があり、このことが授業を構想する際の教師の困り感につながっていることが推察される。

このような実態から下位層の子どもの学力（資質・能力）を伸ばすことはもちろん、上位層の子どもの学力（資質・能力）を伸ばすことが本県の課題であるといえる。小学校及び中学校では平成 29 年告示[4), 5)]、高等学校では平成 30 年告示の学習指導要領[6)]において、各教科等の指導に当たっての配慮事項として「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、子どもの主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと」が記載されている。また、学習評価の実施に当たっての配慮事項として「各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」と記載されている。本県の課題を解決するためには、教師が子どもの実態を的確に捉えて授業を構想し、それぞれの子どもの実態に応じて支援を行うという「指導と評価の一体化」を図った授業改善が欠かせないと考える。

そこで､教師が一人一人の子どもの資質･能力を育むための授業改善を図る際に参考となる、指導と評価の一体化を図った授業構想の在り方を提案できないかと考えたことが本研究における問題の所在である。

２　研究の目的

（１）２か年の研究の目的

本研究では、一人一人の子どもの資質・能力を育むために、指導と評価の一体化を図った授業構想の在り方を提案することを目的とする。

（２）令和５年度（１年次）の研究の目的

１年次の研究では､「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想するうえで大切にしたいポイントを見いだすとともに、指導と評価の一体化を図った授業構想の在り方を明確にすることを目的とする。

３　研究の計画

（１）令和５年度（１年次）の研究

①一人一人の子どもの資質・能力を育むための「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を作成する。

②「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想するうえで大切にしたいポイントを列挙する。

③協議を通して、それぞれを構想するうえで大切にしたいポイントを分類・整理する。

④分類・整理した結果から指導と評価の一体化を図った授業構想の在り方を見いだす。

（２）令和６年度（２年次）の研究

①研究協力者とともに、1年次の研究で見いだした大切にしたいポイントに基づいて､「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想する。

②研究協力者の授業実践や協議等によって得られた情報を基に､「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想するうえで大切にしたいポイントに修正を加える。

③指導と評価の一体化を図った授業の在り方を提案する。

研究成果物を島根県教育センターＨＰに掲載するとともに、教職員研修等で活用する。

４　研究の実際

（１）「指導と評価の計画」及び「本時の展開」の作成

子どもの資質・能力を育む授業を行うためには､「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想することが欠かせない。１年次は、**表１**に示す 10 教科において、「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を作成し、構想するうえで大切にしたいポイントを検討した。

表１　「指導と評価の計画」と「本時の展開」を作成した教科

校種	小学校	中学校	高等学校
教科	・社会 ・算数 ・理科	・社会 ・数学 ・理科 ・英語	・地理歴史 ・理科 ・家庭

ア　「指導と評価の計画」の作成について

「指導と評価の計画」を作成する際には、**【補足資料１】**のように①単元・題材の目標、②単元・題材の評価規準、③指導と評価の計画の３点について記載した（以下、「単元・題材」を「単元」という）。また、上記①～③の３点に加えて、構想するうえで大切にしたいポイントを吹き出しで記載した。

イ　「本時の展開」の作成について

「本時の展開」を作成する際には、**【補足資料２】**のように①本時の目標（ねらい）、②展開（本時の学習）、③評価基準の３点について記載した。なお、②展開については、導入、展開、終末の３つに学習場面を分けた。また、上記①～③の３点に加えて、構想するうえで大切にしたいポイントを吹き出しで記載した。

（２）「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を構想するうえで大切にしたいポイントの整理

「指導と評価の計画」及び「本時の展開」について以下の方法で、構想するうえで大切にしたいポイントを整理した。

ア　「指導と評価の計画」について

まず**表１**に示した10教科における構想するうえで大切にしたいポイントを端的に付箋に書き出した。そして、**図４**のように付箋を模造紙に貼り、ポイントの内容が類似しているものをまとめながら分類した。

イ　「本時の展開」について

10教科における構想するうえで大切にしたいポイントを端的に付箋に書き出した。そして、付箋を模造紙に貼り、ポイントの内容が類似しているものをまとめながら分類した。

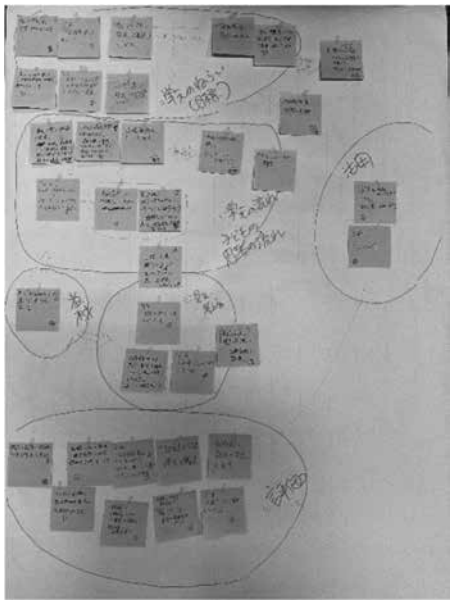


図４　ポイントを整理した模造紙

（３）「指導と評価の計画」において大切にしたいポイント

「指導と評価の計画」を構想するうえで大切にしたいポイントを、単元の目標（ねらい）に係ること、単元の流れ・子どもの思考に係ること、各教科等の見方・考え方に係ること、学習評価に係ること、活用場面に係ることの５つのカテゴリーに類別した。以下、カテゴリーごとに大切にしたい内容について述べる。

ア　「単元の目標（ねらい）」において大切にしたいポイント

（ア）「学習指導要領やその解説を参考にして、単元の目標（ねらい）を整理する」

授業者が育みたい子どもの資質･能力を明確にするためには､単元の目標（ねらい）を設定することが不可欠である。また、学習する子どもにとっても、学びに向かっていく方向性を定めるうえで大切になる。

そのためには、まず単元において育みたい子どもの資質・能力を、学習指導要領やその解説等を参考にして整理する。そして、資質・能力の柱である「知識及び技能」、

「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の３つそれぞれについて、単元における目標（ねらい）を明確にする。その際、土台となるのは学校がめざしている子どもの姿である。これまで子どもが積み上げてきた学びや課題点を踏まえたうえで、学校教育目標の達成に向けて単元における目標（ねらい）を設定することが大切である。

（イ）「子どもの実態（資質・能力の状況）を把握する」

授業の主人公は、子どもである。単元における目標（ねらい）を作成するためには、子どもの実態を踏まえたものにする必要がある。そのために、現段階における子どもの状況を適切につかむ工夫があるとよい。例えば、レディネステストやアンケート等を活用することもできる。これらは教師が客観的に子どもの実態を把握できるだけでなく、子どもが次の学習をイメージし、意欲を喚起する機会にもなる。意欲の喚起という視点から工夫できる点として、前単元もしくは前学年の既習事項と絡めて単元の目標（ねらい）を設定することが考えられる。単元の学習のつながりや過年度の同じ分野や領域からの関係性、あるいは他教科の既習事項に触れながら設定することで、子どもが取り掛かりやすくなることが期待できる。

（ウ）「３つの評価の観点それぞれについて評価規準を設定する」

学習状況の評価については、資質・能力の３つの柱に準じて、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の３つを観点として評価する。単元のどこで、どの資質・能力を育むのかをバランスよく計画する必要がある。また、「目標に準拠した評価」を行うためには、単元における評価規準を設定することが欠かせない。評価規準を作成する際には、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』（国立教育政策研究所）を参考にするとよい。各教科の特性によって単元の取り上げ方は異なるが、基本的には「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえて作成する。そして、評価規準は、単元の目標（ねらい）に対して最終的にめざす姿や状況であると考えるならば、この２つの関係性は対になっていることが求められる。単元の学習後に、単元の目標（ねらい）に対して達成できている姿や学習の状況を見取ることが大切である。

単元の途中において、その段階での子どもの姿や状況が目標（ねらい）に到達できているかどうかを適切に見取り、教師の授業改善に活用することも大切にしたい。また、単元の目標（ねらい）を子どもと共有することで、子どもは自分の状況を客観的に把握し、学習改善に生かすことが期待できる。

イ　「単元の流れ・子どもの思考」において大切にしたいポイント

（ア）「単元そのものの理解を深める」

授業を構想する際に、１単位時間のみの視点から構想していないだろうか。学習指導要領総則には、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる」とある。資質・能力を育むためには、単元という大局的な視点をもって取り組んでいくことが大切である。

（イ）「単元目標から単元を設計する」

単元設計を考える際には、単元を通して育みたい資質・能力を明確にした単元計画を立てる。単元を通して育みたい資質・能力を明確にするためには、学習指導要領を拠り所にしながら、地域や学校の実態、子どもの状況（興味・関心等）も踏まえて設定する。

単元を設計する際には、単元ゴール（単元目標を達成した際に期待される子どもの姿）及びその単元ゴールに到達したかどうかを確認するためのパフォーマンス課題の設定から始めるとよい。そして、単元ゴールに到達できるように１単位時間を設計（逆向き設計とかバックワードデザインなどと呼ばれる）することで、子どもの資質・能力を育む単元計画を構想することができる。

また、単元ゴールは、子どもと共有することが大切であり、そのことが子どもの主体的な学びにつながっていくと考えられる。

（ウ）「単元を貫く課題や問いを設定する」

単元ゴール及びパフォーマンス課題の設定の後に考えたいのは単元の導入である。単元の導入において大切にしたいポイントは次の点である。

①子どもが単元の学習内容に興味を持ち、学びたいと思えるような工夫をする ②単元ゴールに迫っていくための単元を貫く課題や問いを設定する

単元を貫く課題や問いが単元の導入時に示されたり、導入で出会ったりすることによって子どもが問題を見いだすことができ、見通しをもって単元の学習に臨むことができるようになる。また、教師にとっても単元ゴールに向けてどのような資質・能力を育んでいくのかを意識できるようになることが期待できる。このことから、「単元の１時間目が単元全体を左右する」と言っても過言ではない。

（エ）「単元を通した子どもの思考の流れを考える」

単元ゴールは、単元を通して子どもが取り組みたくなるゴールを設定することが大切である。そのためには、子どもが課題や問題を自分事としてとらえ、課題や問題の解決に向けて試行錯誤しながら取り組んでいく過程を単元の中に位置付けることがポイントとなる。単元の構成は、それぞれの小単元がつながっており、少しずつ深まっていきながら、単元ゴールに迫っていく流れを考えたい。また、それぞれの小単元で確実に子どもの資質・能力を育成しながら、最終的に単元全体で育成を目指す資質・能力に到達していくようにしたい。

ウ　「各教科等の見方・考え方」において大切にしたいポイント

（ア）「働かせたい見方・考え方を意識する」

現行の学習指導要領の要点の１つに「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが掲げられている。「深い学び」を実現するための鍵とされるのが「見方・考え方」である。**図５**のように、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、社会に出てからも学んだことを生かせる資質・能力を育むことが大切である。新しい知識・技能をすでに獲得している知識及び技能と結び付け、社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものにし

たりすることは、社会や世界にどのようにかかわるかの視座を形成するために重要なものとなる。各教科等の学びの中で育んだ「見方・考え方」を働かせながら、世の中の様々な物事を捉えることで、よりよい社会を創り出すことが期待できる。

○各教科の「指導と評価の計画」において大切にしたいポイントの例

［小理］どのような場面でどのような「見方・考え方」を働かせるかを考える。

［小社］〔内容の取扱い〕に即して、単元のまとめで、「見方・考え方（選択・判断）」を働かせて選択・判断できるようにする。

［小社］単元目標の設定において、どのような「社会的な見方・考え方」を働かせるかを明記する。

［地歴］単元目標（特に思考・判断・表現）を設定する際に、生徒が「社会的な見方・考え方」を働かせることを意識できるようにする。

図５「教科等の学習と社会をつなぐ」具体例

出典：「平成 29・30・31 年改訂 学習指導要領リーフレット」（文部科学省）[7)]

（イ）「各教科等における見方・考え方を明確にして、単元の学習に取り入れるようにする」

各教科等においては、固有の「見方・考え方」が示されている。「見方・考え方」とは「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方であり、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすもので、教科等の学習と社会をつなぐものである。

そのうえで、「今回の学習指導要領改訂では、育成を目指す資質・能力は３つの柱に沿って各教科等で整理されており、『見方・考え方』それ自体は資質・能力には含まれない」[8)]こと、「微細に整理し、授業の分析や設計を試みるのではなく、骨太に捉え、学びを確かにイメージし構想する」[8)]ことに留意したい。

○各教科の「指導と評価の計画」において大切にしたいポイントの例

［小算］単元の学習において前時等の学習で身に付けた「見方・考え方」を活用することができるようにする。

［小社］評価の際に、子どもが「見方・考え方（日常生活との関連）」を働かせているかという視点から見取る。

［高家］単元計画の作成時に「見方・考え方」を働かせた問いを設けるなど、「学習指導要領解説」を参考に作成する。

［地歴］評価時に、「見方・考え方（推移・影響）」を働かせているかを確認する。

（ウ）「比較・分類・概念化等を通して、子どもの気付きを促し、次の学習につなげるようにする」

教師は、子どもが自在に「見方・考え方」を働かせることができるようにすることを大切にしたい。例えば、指導方法を工夫して必要な知識及び技能を獲得できるようにし、加えて、子どもの思考を深めるために発言を促したり、気付いていない視点に気付けるように働きかけたりするなどの手立てが考えられる。

○各教科の「指導と評価の計画」において大切にしたいポイントの例

［小理］自然事象の差異点や共通点を比較しながら調べる活動を通して問題を見いだしていく。

［中理］「見方・考え方（条件制御）」を働かせて、子どもが予想や仮説を設定したり、解決方法を立案したりできるようにする。

［中数］別の視点（「見方」）から読み取ったり、条件を変えて新しい性質を見いだしたりする学習を通して、統合的・発展的に考えること（「考え方」）を促す。

［中社］資質・能力を育むための社会的な「見方・考え方」の定着をねらい、２つ以上の社会的な事象を比較し、その気付きを生かす工夫をする。

［高理］単元の目標（見いだして表現する）に即して、子どもの気付き・気付いたことから（「見方・考え方」を働かせて）特徴・関係性を考えられるようにする。

エ　「学習評価」において大切にしたいポイント

（ア）「確認、指導、記録に残す計画を考える」

学習指導の目標（ねらい）が達成されたかどうかについて、まずは評価規準に照らして子どもの学習状況を観察して「確認」することが大切である。そして、確認した子どもの状況に応じて学習活動を通して「指導」を行う。さらに、その学習活動の状況を評価規準に照らして「記録」する一連の評価の過程は、子どもの資質・能力を育むためには不可欠である。このように、どの学習時間で「確認」、「指導」、「記録」するのかについて「指導と評価の計画」を作成することが必要である。

（イ）「記録に残す評価は、子どもの変容が見取れるように学習指導の後に設定する」

記録に残す評価は「確認」、「指導」の後に行うことが欠かせない。学習後における

子どもの変容を見取るためには、「確認」において子どもの学習状況を丁寧に見取る必要がある。例えば、「確認」の時間に座席表を用意しておき、その座席表に確認した子どもの学習状況をメモするなどの方法が考えられる。学習前の子ども一人一人の学習状況をメモしておくことで、学習後における子どもの変容を見取ることが可能になる。

（ウ）「記録に残す評価と授業改善につなげる評価を明確にする」

「指導と評価の計画」を作成する際には、「記録に残す評価（観点別学習状況に係る記録）」を行う学習時間と「授業改善につなげる評価」を行う学習時間を設定する必要がある。このように学習前に「指導と評価の計画」を作成することで、学習時間ごとの指導と評価の視点を明確にすることができる。例えば、「授業改善につなげる評価」は、「確認」の時間を中心に実施することができる。また、子どもの学習状況を丁寧に見取ることで、「指導と評価の計画」を見直し、次の授業が子どもの資質・能力を育むためのよりよい学習活動となるように授業改善を行うことが可能となる。

（エ）「評価の材料集めや指導自体の評価に陥らないようにする」

毎時間の学習は、子どもの資質・能力を育むための学習活動であることは言うまでもない。各時間の学習が、「評価材料」を集めるための時間になっては本末転倒である。また、子どもの資質・能力を育むことを棚に上げ、教師の指導を評価するための評価であってはならない。このような状況に陥らないために、「指導と評価の計画」において、「記録に残す評価」と「授業改善につなげる評価」を区別することが大切である。

（オ）「記録に残す場面を精選する」

すべての学習時間において全員の記録を取り、総括の資料とするのは現実的ではない。そのため、学習指導を行う前に「指導と評価の計画」を作成し、いつ、どのような方法で評価するための記録を取るのか、記録に残す場面を精選することが必要である。

（カ）「どのように記録に残す評価を見取るのかを具体的にする」

「知識・技能」の評価については、学習の過程を通した個別の知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既有の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについて評価する。具体的な評価の方法としては、ペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮するなどの工夫改善を図るとともに、子どもが文章による説明をしたり、各教科等の内容の特質に応じて、観察、実験したり、式やグラフで表現したりするなど、実際に知識や技能を用いて学習する場面を設けることが大切である。

「思考・判断・表現」の評価については、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な「思考力、判断力、表現力等」を身に付けているかどうかを評価する。「見方・考え方」を働かせた学びが「思考力、判断力、表現力等」の育成につながることに留意する必要がある。具体的な評価の方法としては、ペーパーテストのみならず、論述やレポートの作成、発表、グループでの話合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど、思考力、判断力、表現力等を見取ることができる学習活動を設けることが大

切である。

「主体的に学習に取り組む態度」は、2 つの側面を評価する。①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面と、②この粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとする側面の 2 つである。具体的な評価の方法としては、教師が評価を行う際に考慮する材料の 1 つとして用いることができるようノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や子どもによる自己評価や相互評価等の状況を見取ることができる学習活動を設けることが大切である。

(キ)「各時間の目標に準拠した評価規準を設定する」

「指導と評価の計画」を作成する際には、各学習時間における評価規準を明確にしておくことが大切である。この評価規準は、各学習時間の目標（ねらい）に準拠したものでなくてはならない。各学習時間の目標（ねらい）は、子どもに身に付けてほしい資質・能力である。評価規準は目標（ねらい）に準拠したものであることから、子どもがどのような資質・能力を身に付けることができたかについて評価規準を設定する必要がある。なお、各学習時間の目標（ねらい）及び評価規準は、学習指導要領の内容に基づいて設定することが欠かせない。

(ク)「学習評価の観点は、1 時間の中で 1 つがよい（多くても 2 つまでにする)」

学習評価は目標（ねらい）に準拠して行う。1 時間の学習において、多くの目標が設定された場合には、教師も子どもも何を目標にして学習活動を進めればよいか、1 時間のゴールが曖昧になりかねない。また、全国中学校理科教育研究会会長の山口晃弘は「1 時間の授業で 3 観点すべてを評価する必要はない。個々の授業でどの観点に重点を置くのかを明らかにし、単元を通して多様な観点について評価できればよい。」[9] としている。

このように考えると、1 時間の学習において、学習評価の観点は 1 つ、多くても 2 つに設定することが望ましい。

(ケ)「学習評価の観点ごとに留意点を記述する」

「指導と評価の計画」において、学習評価を行う際にどのような規準を設定し、どのように子どもの姿を見取るかなどの留意点を記述しておくとよい。留意点を記述しておくことで､次年度の学習活動を進める際に､前年度の留意点が改善の視点になる。このように、作成した「指導と評価の計画」を年度ごとに見直していくことも大切である。

オ　「活用場面」において大切にしたいポイント

(ア)「生きて働く知識及び技能を育むために、活用につながるようにする」

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申)』[10] には、次のように記載されている。

「各教科等において習得する知識及び技能は、個別の事実的な知識のみを指すものではなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識となるものを含むものである。

例えば、“何年にこうした出来事が起きた”という歴史上の事実的な知識は、“その出来事はなぜ起こったのか”や“その出来事がどのような影響を及ぼしたのか”を追究する学習の過程を通じて、当時の社会や現代にもつ意味などを含め、知識が相互につながり関連付けられながら習得されていく。それは、各教科等の本質を深く理解するために不可欠となる主要な概念の習得につながるものである。そして、そうした概念が、現代の社会生活にどう関わってくるかを考えていけるようにするための指導も重要である。基礎的・基本的な知識を着実に習得しながら、既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより、学習内容（特に主要な概念に関するもの）の深い理解と、個別の知識の定着を図るとともに、社会における様々な場面で活用できる概念としていくことが重要となる。

技能についても同様に、一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず、獲得した個別の技能が自分の経験や他の技能と関連付けられ、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくということが重要である。

例えば、走り幅跳びにおける走る・跳ぶ・着地するなど種目特有の基本的な技能は、それらを段階的に習得してつなげるようにするのみならず、類似の動きへの変換や他種目の動きにつなげることができるような気付きを促すことにより、生涯にわたる豊かなスポーツライフの中で主体的に活用できる習熟した技能として習得されることになる。

こうした視点に立てば、長期的な視野で学習を組み立てていくことが極めて重要となる。知識及び技能は、思考・判断・表現を通じて習得されたり、その過程で活用されたりするものであり、また、社会との関わりや人生の見通しの基盤ともなる。このように、資質・能力の 3 つの柱は相互に関係し合いながら育成されるものであり、資質・能力の育成は知識の質や量に支えられていることに留意し、それらの活用につながるようにすることが必要である。」

このことは、「活用場面」において大切にしたいポイントである。

（イ）「身に付けた資質・能力を活用できる学習活動を設定する」

子どもが学ぶ過程の中で、新しい知識と既有の知識や経験とを結び付けることで、各教科等における学習内容の本質的な理解に関わる主要な概念として習得し、そうした概念がさらに、社会生活において活用できるものとなる。子どもが、各教科等の学びの過程の中で、身に付けた資質・能力の 3 つの柱を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが大切である。

各教科等の学習活動が、子ども一人一人の資質・能力の育成や生涯にわたる学びにつながる、意味のある学びとなるようにしていくことが重要である。そのためには、授業や単元の流れを子どもの「主体的・対話的で深い学び」の過程として捉え、子どもが、習得した概念や思考力等を手段として活用・発揮させながら学習に取り組み、その中で資質・能力の活用と育成が繰り返されるような指導の創意工夫を促していくことが求められる。例えば、身に付けた資質・能力を活用することができる「ものづくり」などの学習活動を設定することが考えられる。この際、子どもが「ものづくり」

する学習活動において、既習の学習活動で獲得した知識及び技能を目的に合わせて適用できるようにすることが大切である。

（４）「本時の展開」において大切にしたいポイント

「本時の展開」を構想するうえで大切にしたいポイントを、授業構想全体に係ること、導入場面に係ること、展開場面に係ること、終末場面に係ることの４つのカテゴリーに類別した。以下、カテゴリーごとに大切にしたい内容について述べる。

ア　「授業構想全体」において大切にしたいポイント

本時の授業を構想する際は、それまでの子どもの学びを踏まえて、学習指導要領が示す目標に基づいて、本時で育む子どもの資質・能力を見据えて、本時の目標（ねらい）を設定しなければならない。そのために以下が重要な点としてあげられる。

（ア）単元で育む資質・能力との関連

まず、単元で育てたい資質・能力から設定した、本時で育てたい資質・能力に基づいて、本時の目標（ねらい）を設定する。その際に次のことに留意したい。

（ａ）単元の目標を達成するための本時の目標（ねらい）であること

当然ながら各時の目標を達成していくことで最終的に単元の目標が達成されていくように構想しなければならないし、そのための１時間として本時を構想する。言い換えれば、「本時の目標」と「指導と評価の計画」との整合性を図る必要がある。

例えば、本時が主に思考力、判断力、表現力等を育てる時間とすると、どのような活動を通して、どのような見方・考え方を働かせ、何を考え、表現できるようにすることで目標を達成するのかなどを考慮して構想する必要がある。

（ｂ）目標に基づいて本時のゴールにおける子どもの姿を想定する

本時の目標（ねらい）を設定したら、１時間の最後の子どもの姿を想定することで、教師は子どもの発言やつぶやきを取り上げて話合いをコーディネートしたり、適切に評価や支援をしたりすることが可能になる。その際に、最終的なまとめの内容を、具体的な子どもの言葉で想定しておくことが大切である。

（イ）各教科等で育む資質・能力との関連

本時の目標（ねらい）は、各教科等を通じて育みたい資質・能力を踏まえることや、それまでの子どもの学びの状況を踏まえて、設定することが大切である。

（ａ）校種間・学年間の関連を意識する

各教科等における、各学年の目標を意識することで、これから学習する内容と既習事項とのつながりを明確にでき、子どもの実態に応じた学習を構想できる。

（ｂ）それまでの子どもの学びや既習事項等を意識する

本時の授業を構想する際に、それまでに子どもが学んだことを活用することは、子どもの主体的な学びや深い学びの姿につながる。例えば、子どもが学習課題に対して、「これは前の学習で学んだ考え方を使ったら解決できるかもしれない。」と予想したり、「今までの方法ではこの課題は解決できないから新しい方法が必要だ。どんな方法があるかな。」と思考したりできるように授業を構想することも有効である。

イ　「導入場面」において大切にしたいポイント

導入では、子どもに「どのような」教材・題材と「どのように」出会わせるかを工夫することが大切である。よりよい出会いは、子どもが学習に興味・関心を持ち、主体的な学習を進める原動力になる。目標（ねらい）に基づいた本時のゴールを明確に描き、子どもの姿を想定したうえで、導入を構想することが欠かせない。

（ア）興味・関心を持たせ、自分事として捉えられるようにすること

「子どもの問い」など、本時のめあてを子どもが「自分事」として捉えられるよう工夫することで、主体的な学習につながる。既習事項を確認することで、子どもがこれまでに活用した資質・能力を働かせて、本時の学習に向かうことができる。また、これまでの学びや小中高の系統性を意識することができる。

（イ）見通しを持てるようにすること

子どもは学習の見通しをもつことで、主体的に活動することができる。その際、最終的にはこういうところに向かっていけばよいという活動の見通しだけでなく、こういうことを順番にやっていけばよいのではないかという、考える見通し、考える視点を持てるようにすることも大切である。

（ウ）必然性があり意欲が高まる学習の課題や問題の設定

子どもが学習課題を日常生活や社会と関連付けて考えられるように、事象に対する興味・関心を高める教材や題材を取り上げ、子どもの言葉や考えを引き出しながら本時の課題につなげていくことが大切である。

ウ　「展開場面」において大切にしたいポイント

例えば、本時の主な目標を思考力、判断力、表現力等を育てることとした場合、展開場面は、子どもが自分の考えを持ち、それぞれの教科の見方・考え方を働かせて課題や問題を解決する活動を通して、思考力、判断力、表現力等を育てる場面である。また、他者の考えと自分の考えを比べ、自分の考えを自己調整する力も育まれる場面である。そのために次のような点が重要である。

（ア）個別の追究活動

課題や問題を解決する活動に主体的に取り組むために、個で追究する場を設定し、自分の考えをもったり、活動したりできるようにしたい。そのために次のような配慮を行う。

（ａ）個の実態に応じた適切な表現方法（ノート、ワークシート、動作化、具体物、ホワイトボード、タブレットなど）を選択できるようにする。

（ｂ）言葉だけでなく、絵や図、具体物、マインドマップやマトリックス表等の思考ツール等を活用して多面的に表現できるようにする。

（ｃ）予想される子どもの反応と対応の仕方を考えておき、指導案に記載しておく。正答や期待する反応だけでなく、誤答や陥りやすい考えも想定し、どのように取り上げ学習を進めるかを考えておく。それにより、あわてずに子どもの多様な考えを受け入れることができる。教師に余裕があれば、子どもの考えを理解し、取組を認め賞賛していくこともできる。どの考えを生かしていくかを考えておくと集団での追

究活動でも子どもの考えを大切にしながら目標（ねらい）に迫ることができる。ただし、予め想定していても、想定外の考えが出ることもある。そのときは、教師を超えるすばらしい考えと受け止め賞賛し、それも含めて子どもとともに考えていく心の余裕をもちたい。

（イ）集団での追究活動

（ａ）教師がファシリテートして、集団で追究する

予め個別の追究活動で把握していた子どもの考えを取り上げみんなで考える。学習のねらいを踏まえ、予めどのような考えを取り上げて学習を進めるのかを考え、展開に記載しておく。例えば、多くの子どもが陥りやすい考えをしている子どもの考えを取り上げ、学級全体で考えていく。また、対立する複数の考えを取り上げ、多角的に検討していく。さらに、途中まで考えたが、結論が出ていない考えを取り上げて続きを考える等の取り上げ方もある。複数の方法や考えがあり、それぞれの特徴がある場合には、子どもの言葉で解決方法に名前をつけ、今後の学習に生かしていくこともできる。このように各教科の特徴的な見方・考え方を働かせている場面を意図的に設定していくことも大切である。

集団で追究する場面において留意したいことは、一人一人が自分の考えをもち、集団で追究する中で他者の考えと自分の考えを比べながら、より妥当な考えをつくっていくことである。集団で追究する中でも一人一人が自分の考えを振り返り見直す場を設定していくことが肝要である。

（ｂ）子ども同士で考えを共有する

複式学習におけるガイド学習では、子どもがファシリテーター役になって集団で追究する。また、ICT を活用した単元内自由進度学習[注1)]では、個別の考えが共有され、必要に応じて友だちの考えを確認したり、質問したりして追究することができる。子どもが主体的に学ぶ姿としてこのような取組も参考にしたい。

エ　「終末場面」において大切にしたいポイント

（ア）まとめ

本時の学習で解決したことを、本時の学習で使われた言葉を使ってまとめることが大切である。例えば、キーワードを全体で確認して、それを使ってまとめていく方法も考えられる。

まとめをする際、教師が一方的にまとめるのではなく、できるだけ子どもの言葉を拾いながらまとめていくようにすることが肝要である。教師から教えてもらった学びではなく、子どもが主体的な学びとして自覚できるようにすることが期待できる。また、１時間で解決できなかった場合は、次時への課題としてまとめておくことで、次時の導入場面を省略することもできる。

各教科等それぞれの「見方・考え方」を働かせた考えや意見を、教師は積極的に取り上げて価値付け（評価言）を行い、他の場面でも働かせられるように促すことが大切である。

（イ）振り返り

授業の感想や考えたことを書くように指示するだけでは、「おもしろかった」「楽しかった」という振り返りに留まってしまう。新しい気付きがあったり、深い学びにつながったりするためには、教師が振り返りの視点をもっていること、そしてそれを子どもに示すことが大切である。例えば、子どもが解決の方法や答えはこれでよかったのか吟味したり、本時の学習を既習事項と関連付けて統合したり、新たな課題に発展させたり、日常生活に活用できるようにしたりすることも考えられる。他にも、その教科等のよさに気付いたり、その教科等を学ぶことを楽しいと感じたりする、自己認知の機会であると捉え、振り返ることもできる。

振り返りを全員で共有することも効果的である。ICT 機器を活用して、全員の振り返りを画面共有したり、深い学びにつながるような振り返りの例を他の子どもに紹介したりすることが、さらに新しい気付き、学びにつながる。そして、それを１時間１時間積み重ねることで、学びがどんどん深まることが期待できる。

単元を通して振り返りシートに記入することで、子ども自身が変容の様子を把握でき、自らの学びを振り返り、改善に生かすことができるようになる。また、教師は生徒の変容を捉えることで評価することができるとともに、それを指導に生かすことができるようになる。

（ウ）評価・支援

「本時の目標（ねらい）」と「評価規準」にブレがないことが大切である。基本的に本時の目標（ねらい）を達成したとする子どもの姿は、「概ね満足できる状況（Ｂ）」となる。つまり、教室の子ども全員が「Ｂ」以上になることで、本時の目標（ねらい）は達成されたということになる。

授業中に机間指導をしながら、子どもの状況を的確に見取り、それぞれの状況に応じた支援を行うため、具体的な支援を事前に考えておくことが大切である。

「Ｃ」と見取った子どもに対する支援としては、「既習事項が使えないか考えてみよう」、「具体的な例で考えてみよう」、「教科書やノートを見て確認してみよう」、「友だちの考えを聞いてみよう」、「ヒントカードを使ってみよう」などと働きかけることが考えられる。ただし、いつまでも前述の支援（指示）を繰り返すばかりではなく、わからなくて困ったときには、友だちや先生に自分から聞きに行ったり、教科書やノートを見て考えたり、タブレットで調べたりするなど、わからない点を放っておかず自ら学びを求めて積極的に動けるように日頃から支援することが大切である。このような支援を積み重ねていくことで、自己調整力の育成が図られ、自立した学習者に育っていくことが期待できる。

また、上位層の子どもの学力を高めていく視点で考えると、「Ｂ」と見取った子どもに対して次のような言葉がけをして学びを深めることができる。例えば「１つの考え方でできたら２つ目３つ目を考えてみよう」、「自分の考えを友だちにわかりやすく説明してみよう」などと働きかけることが考えられる。特に、自分の考えを友だちにわかりやすく説明する方法（関連付ける、比較する、分類する、根拠を示す、具体物を使う、具体例を示すなど）を考えたり、実際に説明したりする汎用的な資質・能力を育むことも大切にしたい。また、そのような学びが学級の中で行われることで、

学級集団全体の学びの質が高まっていくことが期待できる。さらに、「A」と見取った子どもに対しては、問題解決の過程を振り返らせ、新たな問題の発見を促すなど、発展的な学びにつながる支援を行うことも考えられる。

すべての子どもの可能性を伸ばす学びとなるよう、一人一人の状況に対応した具体的で適切な支援を事前に考えておき、行うことが大切である。

5　考察

（1）「指導と評価の計画」において大切にしたいポイントから見いだした重点

「指導と評価の計画」の大切にしたいポイントをまとめることで、２つの重点を見いだすことができた。

ア　学習指導要領解説を読み解き、育みたい子どもの資質・能力を明確にする

「指導と評価の計画」における大切にしたいポイントとして、「資質・能力」という言葉が何度も使われている。学習指導要領解説を読み解き、授業を通して学習指導要領解説に示されている資質・能力をどのように育んでいくのかを明確にする必要がある。

「指導と評価の計画」を作成することで、教師が育みたい子どもの資質・能力を明確にすることができ、その資質・能力をどのように育むのかを構想することができる。さらには、育成された子どもの資質・能力をどのように見取り、見取った評価をどのように授業改善に生かしていくのかを整理することができるようになると考える。

教師が育みたい子どもの資質・能力を明確にすることが、授業を構想する際に最初にしなければならない重点である。

イ　子どもが資質・能力を発揮している具体的な姿をイメージして学習活動を設定する

「指導と評価の計画」における大切にしたいことは、「子どもの姿」を具体的にイメージしながら構想することである。授業を通して育みたい子どもの資質・能力は「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」である。その資質・能力を育むためには、授業において子どもが資質・能力を発揮しながら、さらにその資質・能力を育むことができるように展開することが欠かせない。学習活動において資質・能力を発揮している具体的な子どもの姿をイメージすることで、学習前よりも資質・能力を高めている具体的な子どもの姿を目指して授業を展開することができたり、資質・能力を繰り返して活用しながら学習前より確かな資質・能力として身に付けている具体的な姿が見られるように構想したりできるようになる。

裏返せば、「指導と評価の計画」を作成することによって、学習活動において子どもが発揮している資質・能力を具体的な子どもの姿でイメージすることができるようになるとも言える。このように、「指導と評価の計画」を作成する際に、子どもが資質・能力を発揮しながら、さらにその資質・能力を育むことができる学習活動を、具体的な子どもの姿をイメージしながら設定することがもう１つの重点である。

（2）「本時の展開」において大切にしたいポイントから見いだした重点

「本時の展開」において大切にしたいポイントをまとめることで、３つの重点を見いだすことができた。

ア　「本時の目標（ねらい）」と「指導と評価の計画」との整合性を図る

単元の目標を達成するために、１時間１時間の目標（本時の目標）がある。逆に捉えれば、１時間１時間の目標（本時の目標）を達成できるよう指導と評価をしていくことで、最終的に単元の目標が達成されることになる。本時の授業を構想する際には、「本時の目標（ねらい）」と「指導と評価の計画」とのつながりを常に意識し、整合性を図りながら、適切な指導と評価を構想する必要がある。そして、指導と評価の一体化を図った授業を行うことで、子どもに資質・能力が育まれる。

「指導と評価の計画」を構想する際に設定した単元の目標を達成するために、本時の目標（ねらい）を設定し、指導と評価をしていくことが重点である。

イ　指導と評価の一体化を図るための具体的な手立てを構想する

本時の目標（ねらい）を達成するために、導入場面、展開場面、終末場面、それぞれにおいて大切にしたいポイントを記した。前述したとおり、「指導と評価の計画」を意識し、整合性を図りながら、本時の目標（ねらい）を設定し、授業を構想することが大切である。さらに、一人一人の子どもの状況や学級の実態を踏まえ、本時の目標（ねらい）を達成するために、どのように授業を構想し、指導と評価を行えばよいのか、教師は事前に具体的な手立てを考えておく必要がある。

これまでの子どもの学びや既習事項等を踏まえて、学習後の子どもの姿を想定し、学習前に目標（ねらい）を達成するための具体的な手立てを構想することが、指導と評価の一体化を図るための重点である。

ウ　指導と評価の一体化を図るための具体的な支援を準備する

「指導と評価の計画」と整合性を図りながら、「本時の目標（ねらい）」及び「評価基準」を設定する。本時の目標（ねらい）を達成したとする具体的な子どもの姿は、「概ね満足できる状況（Ｂ）」である。つまり、教師は教室の子ども全員が「Ｂ」以上となることを目指し、指導することになる。

本時の目標（ねらい）を達成するためには、授業中、子ども一人一人の状況を的確に見取り、それに応じた適切な支援を行うことが大切になる。「Ｃ」と見取ったならば「Ｂ」になるような支援を、「Ｂ」と見取ったならば「Ａ」になるような支援を、授業前に具体的に考えておくことが大切である。授業中の子どもの状況を的確に見取る評価が、目標達成のための支援（指導）につながる。評価を伴わない指導、指導に生されない評価はあり得ず、指導と評価の一体化を図らなければならない。

見取った子どもの姿や学習の状況に対して、具体的にどのような支援を行うのかを明確にし、学習前に準備しておくことが、指導と評価の一体化を図るための重点である。

６　まとめ

（１）１年次の成果について

１年次の研究において「指導と評価の計画」及び「本時の展開」を実際に作成し、大切にしたいポイントを検討することで、それぞれの重点を見いだすことができた。

「指導と評価の計画」については、大切にしたいポイントを「単元の目標（ねらい）」、「単元の流れ・子どもの思考」、「各教科の見方・考え方」、「学習評価」、「活用場面」に類別、整理した。これらを意識して構想することで、教師が単元を通して育みたい子どもの資質・能

力を明確にできることが見えてきた。さらには、「指導と評価の計画」の構想において子どもが資質・能力を発揮している具体的な姿をイメージして単元の学習活動を設定することが、指導と評価の一体化を図るための重点であることが見えてきた。

「本時の展開」については、大切にしたいポイントを「授業構想全体」、「導入場面」、「展開場面」、「終末場面」の場面ごとに類別、整理した。これらの場面におけるポイントを意識することで、教師は本時の目標（ねらい）を達成するための具体的な手立てを構想できるようになることが見えてきた。また、見取った子どもの姿や学習の状況に対して、具体的にどのような支援を行うのかを明確にし、学習前に準備しておくことが、指導と評価の一体化を図るための重点であることが見えてきた。

「指導と評価の計画」及び「本時の展開」における重点を整理することを通して、教師が「子どもの具体的な姿」をイメージすることの大切さが見えてきた。学習活動において子どもが資質・能力を発揮している具体的な姿をイメージすることで、資質・能力を育むための単元を計画したり、授業を構想したりすることができるようになる。また、子どもの具体的な姿をイメージしておくことで、学習活動における子どもの状況を確認し、「十分満足できる状況」、「概ね満足できる状況」、「支援が必要な状況」等を的確に見取り、評価することができるようになる。このように、指導と評価の一体化を図った授業を構想するためには、学習活動における「子どもの具体的な姿」をイメージし、子どもの資質・能力を育むための具体的な「手立て」や「支援」を明確にしておくことの重要性が見えてきた。

（２）２年次の研究について

１年次の研究から、２年次の研究を進めるための仮説を次のように設定した。

【仮説】大切にしたいポイントを踏まえて「指導と評価の計画」及び「本時の展開」の構想をすることで、指導と評価の一体化を図るための「手立て」と「支援」が明確になり、子どもの資質・能力を育むことができるであろう。

２年次においては、指導と評価の一体化を図るための「手立て」と「支援」に着目し、研究を進める。その際、島根県内の授業実践者の協力を得て、授業実践を通して仮説を検証していきたいと考える。そして、最終的には本研究の目的である「一人一人の子どもの資質・能力を育むために、指導と評価の一体化を図った授業構想の在り方」を県内の先生方に提案できるよう研究を深めていきたいと考える。

【補足資料１】「指導と評価の計画（小学校　算数）」

単元の目標(1)(2)は学習指導要領解説を、(3)は「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（以下、参考資料）を基に設定します。

小学校　算数

教科等	小学校　算数	担当学年	第　5　学年
単元名	比べ方を考えよう		

「C 変化と関係」領域は、次の三つの内容で構成されています。
①伴って変わる二つの数量の変化や対応の特徴を観察すること。
②ある二つの数量の関係と別の二つの数量の関係を比べること。
③二つの数量の関係の考察を日常生活に生かすこと。
また、ここでの数学的な見方・考え方は、「伴って変わる二つの数量やそれらの関係に着目し、変化や対応の特徴を見いだして、二つの数量の関係を表や式を用いて考察する力」です。

単元（題材）の目標

(1)知識及び技能	速さなど単位量当たりの大きさの意味及び表し方について理解し、それを求めること。
(2)思考力、判断力、表現力等	異種の二つの量の割合として捉えられる数量の関係に着目し、目的に応じて大きさを比べたり表現したりする方法を考察し、それらを日常生活に生かすこと。
(3)学びに向かう力、人間性等	異種の二つの量の割合として捉えられる数量について、数学的に表現・処理したことを振り返り、多面的に捉え検討してよりよいものを求めて粘り強く考える態度を身に付けること。 数学のよさに気付き学習したことを生活や学習に活用しようとする態度を身に付けること。

この単元の評価規準は参考資料P144(2)「異種の二つの量の割合」の四角囲みを参考に、学校の教育課程や児童の実態に応じて設定します。

評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①異種の二つの量の割合として捉えられる数量について、その比べ方や表し方について理解している。 ②単位量当たりの大きさについて理解している。 ③異種の二つの量の割合で捉えられる速さや人口密度などを比べたり表したりすることができる。	①異種の二つの量の割合として捉えられる数量の関係に着目し、目的に応じた、大きさの比べ方や表し方を考えている。 ②日常生活の問題（活用問題）を、単位量当たりの大きさを活用して解決している。	①異種の二つの量の割合として捉えられる数量の関係に着目し、単位量当たりの大きさを用いて比べることのよさに気付き、学習したことを生活や学習に活用しようとしている。 ②単位量当たりの大きさを活用できる場面を身の回りから見付けようとしている。

指導に生かす評価を行う代表的な機会については「・」を，その中で特に学級全員の児童の学習状況について，総括の資料にするために記録に残す評価を行う機会には「○」を付けています。

指導と評価の計画

時	主な学習活動	評価規準、（評価方法）		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1 2	・うさぎ小屋の混み具合を比べるためには、どのような数量が必要なのかを考える。 ・混み具合を比べるためには、面積またはうさぎの数のどちら		・思①（行動観察、ノート分析）	・態①（行動観察、ノート分析）

	かをそろえればよいことを考える。 ・どちらかの数量の１あたり量を比べると便利なことに気付く。	・知①（行動観察、ノート分析）		
3	・前時の学習を基に、複数の都道府県の人口の混み具合の比べ方を考える。 ・人口密度の意味を知り、身近な（知りたい）地域の人口密度を求める。	・知③（行動観察、ノート分析）	○思①（行動観察、ノート分析）	
4	・米のとれ具合を、単位量当たりの大きさを用いて調べる。	・知③（行動観察、ノート分析）		
5	・速さを決めるために必要な量について考える。 ・走った距離、時間が異なる人の速さの比べ方を考える。 ・速さは、単位時間当たりの距離で表現することが便利であることに気付く。		・思①（行動観察、ノート分析）	・態①（行動観察、ノート分析）
6	・「時速」「分速」「秒速」の意味を知り、公式を用いて速さを求める。	・知③（行動観察、ノート分析）		
7	・速さと時間から道のりの求め方を考え、公式を用いて道のりを求めることができる。	・知③（行動観察、ノート分析）		
8	・速さと時間から道のりを求めた考え方を基に、速さと道のりから時間の求め方を考え、説明する。 ・速さ、道のり、時間の関係について、それぞれの求め方を統合的に捉える。		・思①（行動観察、ノート分析）	
9	・身の回りにある、単位量当たりの考えを使っている場面を探す。 ・見つけた場面から問題を作ったり、その問題を解いたりする。	○知①②③（ノート分析）	○思②（ノート分析）	
10	・学習内容の定着を確認するとともに、数学的な見方・考え方を振り返り価値づける。	○知①②③（ペーパーテスト）	○思②（ペーパーテスト）	○態②（行動観察、ノート分析）

これまでは、長さや重さなど、その大きさを一つの量（mやg等）で表し、比較をしてきています。そのため、速さのように一つの量を二つの量の割合で表すことに考えが及ばない児童が多いと思われます。
ここでは、速さなどの量を表すためには、二つの量が必要であることや、どちらかを基準にしてその割合で表すことが便利であることを児童自らが見つけ出していく工夫が必要です。

この単元において、「伴って変わる二つの数量やそれらの関係に着目し、変化や対応の特徴を見いだして、二つの数量の関係を表や式を用いて考察する力」を身に付けるためには、前時や前小単元の学習で身に付けた見方・考え方を活用しながら問題解決を図る学習活動が大切です。

単元における資質・能力は、学習が進むに従って身に付いていくものです。従って、記録に残す評価は、単元（小単元）の終末に行います。

【補足資料２】「本時の展開（小学校　算数）」

小学校　算数

本時のねらいは、その単元で育成する資質･能力を基に設定します。

「〇〇は速い」という日常生活の事象の中から、数学的に表現した問題として「速さ」を学習活動に取り上げています。

めあては、できるだけ児童の問いを基に焦点化し、その問題に対して児童が見通しをもち、既習事項を生かしながら、解決に向かっていけるものにします。

ICT 機器その他児童が問題解決に有効な環境を整え、個別最適な学びができるようにします。

児童の実態や問題解決の仕方に応じて、個人、ペア、グループなど、最も有効と思われる学習形態を適宜取り入れます。

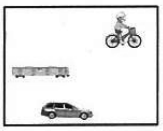
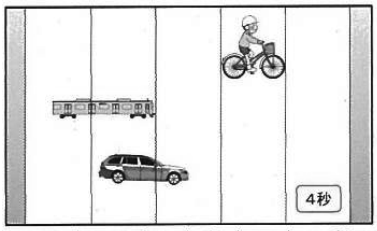
解決の方法はどれがよいかではなく、それぞれの解決方法のよさを共有します。

本時（第５時）のねらい

混み具合を求めたときの考え方を活用し、速さは時間と道のりの二量の割合で表すことを見いだして、異なる速さを比較することができる。

(思考･判断･表現)

本時の学習

学習場面	学習活動と児童の反応（・）	支援（･）と評価（◇評価方法）
導入	〇「電車」「自動車」「自転車」どれが一番速い？ ・電車が速い！ ・自動車かな？ ・自転車は一番遅いはず。 〇速さを比べるとき、どんなときに速いというのかな？ ・早くゴールに着く。(時間が短い) ・遠くまで行ける。（距離が長い） ・追い抜く。	・〇〇が速いという理由を聞き、速さに関する児童の感覚をつかむ。 ・三つの乗り物が併走して走っている（自転車が一番速い）画面を見せることで、速さは乗り物で決まるのではないことを確認する。  ◇速さを表すためには、時間と距離の二つの量が必要であることに気付いている。（観察） ・二つの量の割合で表す場合について、混み具合の学習を想起させ、見通しをもてるようにする。
展開	「時間」と「距離」の２つの量を用いて、速さを比べる方法を考えよう。 ①自転車は5秒で50ｍ進んだ。 ②電車は10秒で50ｍ進んだ。 ③自動車は8秒で50ｍ進んだ。 ④自転車は3秒で30ｍ進んだ。 ⑤自動車は6秒で30ｍ進んだ。 ⑥4秒で、自転車は40ｍ、電車は20ｍ、自動車は25ｍ進んだ。 〇それぞれ違う記録をどのようにして比べたらよいのだろうか？ ・①～③、④⑤は、それぞれ距離が同じなので、時間で比べられる。 ・⑥は時間が同じなので、距離で比べられる。	 ・自転車、電車、自動車が走る動画を端末で自由に見ることができるようにする。 ・個人又はグループで、それぞれの乗り物の速さ（時間と距離）を測定できるようにする。 ・必要なデータを表計算ソフトに記録するよう指示する。 ・時間、距離のいずれか一方をそろえて速さを比べることのよさ（それぞれの考えのよさ）を共有できるようにする。

展開	○③自動車④自転車⑥電車のデータで比べることはできるかな？ ・時間も距離も違うから比べられない。 ・時間か距離が同じだったら比べられるのに…。 ・どちらかをそろえる方法はないかな？ ・人口密度を求めたときの考え方が使えそう。 ・１秒当たりの進んだ距離で比べられるのでは。 ・１ｍ当たりの時間でも比べられるよ。	・時間と速さがバラバラの場合についても速さを比べたいという願いが児童から出ないときには、教師から「時間と速さがバラバラのときは速さを比べることができないんだ。」と投げかける。 ・「時間か距離が同じだったら比べられるのに…」という児童の問いを全体の問題として取りあげ、問題解決を図る。 ・混み具合、人口密度の学習が生かされるよう、既習学習の足跡を教室掲示したり、ノートを見返したりできるようする。 ◇混み具合の学習を想起し、速さも時間と距離の割合で表すことができることを考えている。 （観察、ノート）
終末	○速さはどのように表したらいいのかな？ ・速さを比べるためには、時間か距離のどちらか一方をそろえるとよい。 ・１秒当たりの距離または１ｍ進むのにかかる時間で表すことができる。 ○これまで学習したことをどのように生かすと速さを表すことができたのかな？ ・人口密度や混み具合を表したときと同じで、速さは時間と距離の割合で表すことができる。	・基準とする量が時間、距離いずれでも速さを表すことができることを確認した後、「速いほど数が大きくなる」のは、どちらかを考えられるようにする。 ・長いほど、重いほど、かさが多いほど、それの量を表す数は大きくなるように、速いほど数値が大きくなる表し方が日常生活で都合がよいことに気付けるようにする。 ・本時の学習について振り返る。 ◇既習事項を活かし、速さも２つの量の割合で表すことを統合的・発展的に捉えている。 （ノート）

評価基準

十分満足できる状況	おおむね満足できる状況	努力を要する状況
混み具合や人口密度の学習と関連付けながら、速さは時間と距離の二つの量の割合で表すことができることを筋道立てて説明することができる。	混み具合や人口密度の学習と関連付けながら、速さは時間と距離の二つの量の割合で表すことを考えることができる。	時間と距離のどちらかをそろえることと、単位量当たりの大きさを求めることの意味を比較し、時間と距離のどちらかをそろえることと単位量当たりの大きさを求めることとは似ていることを理解できるようにする。
	十分満足できる状況にするための支援 速さも混み具合や人口密度を表すとき、どのように考え、それを説明したかを振り返るようにする。	

問題解決の途中に生まれた新たな問いを追求したり、ねらいに迫るための教師からの問いかけを行ったりすることで、児童の学びを深めます。

「○○だったら解決できるのに…」という児童の考えを取り上げ、そのようにするにはどうすればよいかを問題として、解決を図っていきます。

問題解決においては、根拠を基に筋道を立てて考えることが大切です。そのためには、日頃から、既習事項を振り返り生かすことで、根拠になるもの（これまで身に付けてきた資質・能力など）を明確にし、筋道を立てて考えたり説明したりする態度を育てます。

本時の学習で解決したことを、本時の学習で使われた言葉を使ってまとめていきます。
1時間で解決できなかった場合は、次時への課題としてまとめておくことで、次時の導入場面を省略することができます。

振り返りでは、解決の方法や答えはこれでよかったのか吟味したり、本時の学習を既習事項と関連づけて統合したり、新たな課題へと発展させたり、日常生活に活用させたりします。

研究同人

令和５年度島根県教育センター企画・研修スタッフ

福島章洋、秋月広美、河野雅子、庄司俊朗、須山健太、仙田浩志、園山裕之、高橋隆子、原一夫、福井道明、松原典生、松本洋和、三浦雄一郎

注１）奈須正裕は中央教育審議会教育課程部会『資料１　奈須委員発表資料』[11] の中で、「単元内自由進度学習」は、概念形成や高次な思考をも含む、より一般的な教科内容を個別化された学びとして実施するために考案されたと紹介している。

【引用文献】

１）島根県委員会：『令和５年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）　島根県（公立）結果概要』, p.5
https://eio-shimane.jp/files/original/2024040317000456800d6e5bf.pdf(2024.2.15 確認)

２）島根県委員会：『令和５年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）　島根県（公立）結果概要』, p.7
https://eio-shimane.jp/files/original/2024040317000456800d6e5bf.pdf(2024.2.15 確認)

３）島根県委員会：『令和５年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）　島根県（公立）結果概要』, p.8
https://eio-shimane.jp/files/original/2024040317000456800d6e5bf.pdf(2024.2.15 確認)

４）文部科学省：『小学校学習指導要領（平成 29 年告示)』, p.22

５）文部科学省：『中学校学習指導要領（平成 29 年告示)』, p.23

６）文部科学省：『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示)』, p.28

７）文部科学省：『平成 29・30・31 年改訂 学習指導要領　周知・広報ツール』
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1413516.htm（2024.2.15 確認）

８）田村学：『学校教育・実践ライブラリ』,Vol.３,2019. , p.44

９）山口晃弘：『評価事例＆テスト問題例が満載！　新３観点の学習評価完全ガイドブック　中学校理科』, 明治図書, 2021, p.17

10）中央教育審議会：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）　平成 28 年 12 月 21 日』, pp.28-30
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
（2024.2.15 確認）

11）中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会：『資料１　奈須委員発表資料』, p.4
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/mext_00461.html
（2024.2.15 確認）

【参考文献】

１）国立教育政策研究所：『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校編)』, 2020.

２）国立教育政策研究所：『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（中学

校編)』, 2020.
３）国立教育政策研究所 :『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（高等学校編)』, 2021.
４）田村学 :『「ゴール→導入→展開」で考える！田村学流「授業づくり・単元づくり」基本の基』, 小学館, 2021, https://kyoiku.sho.jp/112216/ (2024.2.15 確認)
５）中央教育審議会 :『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）　平成 28 年 12 月 21 日』, pp.33-52
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm
(2024.2.15 確認)